

小学生 低学年の部  
中川根南部小1年 原田瑛司  
いっしょにごぶるう、イケノオイ

ぼくのがつこうに、こいをかっているいけがあるよ。だから、イケノオイもぼくのがつこうのいけにすんでくれたらいいのにな。

イケノオイががつこうでいちばんよくきくおとは、みんなのわらいごえだつていつたよ。ぼくのがつこうからも、わらいごえがいつばいきこえてくるよ。ぼくが1ねんせいになったとき、まわりのひとが、「がつこう、たのしい?」

「がつこうって、こんなたのしいんだつておもわなかったよ。」

つて、いつもこたえてた。ぼくのきょうしつからは、いつもみんなのわらいごえがきこえているからね。イケノオイもそのこえをきいてもちよくなるとおもうよ。

りくくんが、イケノオイをいえてかいたくなつたよ。きやべつやこーんをあげたけどたべなかつたのは、かつばはにくしよくだからじゃないかなつてぼくはおもつたよ。かつばはこうらがあるから、かめのなかまだとおもうんだ。だから、にくをあげたらいいよ。

イケノオイがぐんにやりして、しにそうになつたとき、りくくんはしんばいしてじぶんもしにそうだつたね。ぼくもりくくんだつたら、そうなつちやつたかもしれない。ほいくえんのうさぎがしんだとき、すごくかなしくて、よるふとんのなかでなみだがあつたよ。

みかちゃんは、はんかちをぬらしてあげたり、おなかにてをあててあげていたね。

ためではなく、自分たちが生きていくための仕事として、やっているとわかりました。また、命をむだにしない、山の神様から必要なだけわけていただく、という気持ちで仕事をしていると知り、マタギは、命の大切さをだれよりも知っているのではないかと思いました。

マタギの吉川さんが、クマを育てることになつたのは、吉川さんがうったツキノワグマが、二匹の子グマのお母さんで、そのままにしておいたら子グマが死んでしまうからです。吉川さんは、人間のせきになんかと思ひ、育てることにしたけれど、ぼくにもかん単なことではないと、想ぞうでできません。それは、「命を育てる」ということにならなからです。ぼくだつたら、大人の立派なクマになるまで、育てるなんてできません。もしかししたら、死なせてしまうことだつてあるかもしれません。

ぼくは、この本を読んで、「命」にたいしての「せきになん」って何だろうと思ひました。大変だから、めんどうだからと、と中で投げ出してしまつたら、命が消えてしまふことになりまふ。ぼくは、今まで「命を育てるせきになん」をもって生き物を育てていたかな。めんどうになつて投げ出してしまつたこともあつたと思ひます。

マタギは、命をうばう代わりに、いろいろな決まりを守ることで、自然や命を守つています。ぼくもマタギのように、命の大切さを考えながら、生き物をかつたり、育てたりしていきたいと思ひました。ぼくの住んでいる川根本町には、自然がたくさんあり、動物もたくさんいます。自然や動物のことをもつと知つて、ぼくが大人になつたとき、川根本町の自然のこと、動物や生き物の命を大切にすることを、伝えられる

ほけんしつのでせんせい、  
「あまいものをたべるとげんきになるよ。」つていつたのをおもいだして、アンドレくんがあめをあげたらほんとうにげんきになつてぼくもつてもうれしかったよ。みんなでかんがえをだしあつたから、イケノオイはたすかつたんだとおもうよ。

ぼくたちもイケノオイがすすめるようながつこうになるようにかんがえてみるよ。きてくれるのをまつてるよ。

小学生 中学年の部  
中川根第一小4年 松山翔威  
マタギに育てられたクマ

ぼくは、動物が大好きです。

犬やねこ、うさぎのように、手でさわるのできる小さい動物も好きだけれど、ライオンやトラのように動物園でしか見ることのできない、はく力のある大きな動物も好きです。クマもぼくの好きな動物の一つです。見た目は、フカフカの毛がモコモコしていて、仕草がかわいいけれど、大きな手やとがつてするどいつめを見ると、強そうだなと思ひます。そんな人間をおそ

うこともあるクマを、人間が育てるとこの本にきょう味がわきました。「マタギ」は、東北地方でツキノワグマなどのかりをする人達のことをいいます。クマのほかに、山鳥やウサギなどをじゅうでうつて、毛皮や食肉、薬にします。ぼくは、動物を殺すなんてかわいそうだなと、思つたけれど、マタギは楽しみの

ように成長していきたいと思ひます。そのためにも、自然や動物を大切に思ふ心をおすれないで、行動するようにしたいと思ひました。

この話は、1人の少年がサンストーンという不思議な石を探して冒険をする話だ。少年は、家族を助けるために石を探しに出発することを決意する。ぼくと同じくらしい年だというのに、少年のやさしさを感じた。少年のやさしさは、家族を大事だと思ふ気持ちがあるから生まれるのだから、と思ひ、ぼくも家族のことを思ひ浮かべてみた。毎日仕事にでかける父と母。ぼくたちの世話をしてくれる祖母、生意気だけれど楽しませてくれる妹。みんなやつていることはちがつていてもがんばつていっていることはみんな同じ。がんばつている家族には、ぼくが何かしなくてはいけないと考える事ができる。家族を思ふことが家族への思いやりを生み、家族の絆を強くしたり家族を大事だと感じる心を大きくしたりするんだなと感じた。

小学生 高学年の部  
中央小学校6年 高畑駿樹  
セブンスターを讀んで

少年は、石を手に入れるためにいろいろな作戦を立てて試していく。しかし、そのすべてが失敗。それでもすぐに立ち直つて、新しい作戦を立て、また挑戦した。ぼくは、失敗するとすぐに気落ちしてあきらめてしまふことが少なくない。どうしたらうまくいくのかを考えずに親や周りの人に頼り、自分では何もできないことが多い。少年のように自分でも何もかも考え、自分の力で実行

していくということは、正直、今のぼくにはできそうもないことだ。しかし、あきらめない気持ちをもちつとやその気持ちから生まれたアイデアを実行するためには、小さな挑戦から重ねることが大切なのではないか、そういう気持ちでやつてみることにしよう。少年は、仲間を見捨てられない、という気持ちで一心で怖さや失敗をこく服したのではないか。また、きつとうまくいく、と自分を信じる気持ちで敵に向かつたのだから。そして、敵を倒した時には、うれしさと共に、自分にもできた、という満足感でいっぱいだつたと思ふ。

少年は、仲間を見捨てられない、という気持ちで一心で怖さや失敗をこく服したのではないか。また、きつとうまくいく、と自分を信じる気持ちで敵に向かつたのだから。そして、敵を倒した時には、うれしさと共に、自分にもできた、という満足感でいっぱいだつたと思ふ。

ぼくは、もしかしたら失敗するかもしれない、と思ふことが多い。例えば、授業で発表できないことや学校の役割を引き受けられないことだ。ぼくの未来を考えたととき、この物語のように怪物と戦うようなことは無いだろうが、何かから逃げずに挑戦しなくてはならないことは何度もあるはずだ。自分にはできそうもない、と思ひこまらず、「できるかもしれない。きつとうまくいく。」

と、自分に言い聞かせて取り組んでみたい。ぼくが今、この本を読み、まずやつてみようと思つていることは、家族のために行動だ。家族のしてくれていふことに對して、自分にできることを「無理」という言葉で片付けず、やつていくようにしたい。

Zoom up  
第6回  
町民読書感想文・画  
コンクール特選紹介

あなたは、「私の1冊」に出会いましたか?

毎年、町民読書感想文・画コンクールには数多くの出品があり、どの作品からも「空想世界」に思いをはせた様子が伝わってきます。本号では、本年度の特選作品を紹介いたします。各部門抜粋して紹介。原文のまま掲載しています。



小学生中学年の部 特選  
小澤慧納 (中川根第一小3年)  
「わずれないよトル・ジョッシュ」



小学生低学年の部 特選  
高畑菜悠 (中央小2年)  
「つりばし ゆらゆら」



小学生低学年の部 特選  
原田瑛司 (中川根南部小1年)  
「がつこうかつばのイケノオイ」



小学生低学年の部 特選  
細田久美子 (中川根第一小1年)  
「かさぶたくん」